

青年期における「疎外感」の発達と適応との関係

宮 下 一 博* 小 林 利 宣*

I 問題と目的

青少年の非行や暴力行為などの問題行動は、近年、増加と低年齢化の傾向を示している。「疎外感」(alienation)という概念は、心理学では、未だそれほど定着した概念ではないが、問題行動出現解明への1つの手掛りを与えるものと予想される。

たとえば、Gold (1969) は、疎外感に対する対抗処置として青少年の非行を論じ、Bratter (1973) も同様の点から薬物乱用 (drug abuse) との関係を論じ、薬物の乱用は、現代社会に対する不満や幻滅の表現であり、苦しい疎外感の事態からの脱却を求めるものだと考察している。また、Calicchia & Barresi (1975) は、犯罪や非行、薬物嗜好と疎外感との関係を論考し、アルコール中毒患者は、一般人に比べ有意に高い疎外感を持っていることを明らかにした。さらに、時代と共に青少年の疎外感が高くなりつつあることを報告した Schubert & Wagner (1975) や Wolfe (1976) の研究は、問題行動の増加傾向を、的確に言い当てるものかも知れない。

このように、問題行動を疎外感の観点から説明しようとする研究はいくつか見受けられるが、それらは主に、理論的考察の域にとどまり、これを実証的に扱った研究は少ない。

疎外感に関するこれまでの研究を概観した Durand & Lambert (1979) によれば、従来の研究は、①社会の様々な集団間での疎外感の程度の比較、②疎外感を発生させる社会或は社会文化的状況の分析、③疎外感が様々な態度や行動に及ぼす影響という3点にまとめられる。

本研究は、Durand & Lambert (1979) の分類した第3の流れに属するが、この中には、直接問題行動との関係を扱った先の論文の他に、Davids (1955a), Rode (1971), Paulson, Lin & Hanssen (1972), Valentine (1974) らの疎外感と適応との関連を分析した研究等が含まれる。

Davids (1955a) は、疎外感を、自己中心性 (egocentricity), 不信 (distrust), 厭世感 (pessimism), 不安 (anx-

xiety), 怒り (resentment) という下位概念から定義し (Davids 自身は、さらに、自己中心性, 不信, 厭世感の対概念として、利他 (sociocentrism), 信頼 (trust), 楽観 (optimism) を、それぞれ設定している), 疎外感の強い者は、自己と他者一般、および理想的人間との間により大きな隔りを感じ、自我強度に欠けることを報告している。これと関連して、近藤と小林 (1959) は、Davids (1955b) の下位概念に神経質 (neuroticism) を加え、合計9概念に基づく質問紙を家庭内場面で設定した。特に、成人夫婦が、家庭内でどの程度の親密さを感じているかを測定するため、家族親疎性診断目録 (Intra-family Alienation Diagnostic Inventory) を標準化した。また、Rode (1971) は、疎外感と両親に対する認知との関係を調べ、疎外感の高い者ほど両親をネガティブにとらえる傾向があること、Paulson et al. (1972) は、高疎外感の者ほど、幼児期における母性的配慮の欠如や家庭の不和を訴えたことを指摘している。さらに、Valentine (1974) は、疎外感の面において、かなり病理的と思われる3つの事例を報告し、ケースごとに縦断的に家族史を探り、疎外感を家族病理としてとらえる試みを行った。

ところで、疎外ないし疎外感の概念は、哲学の中で生まれ、社会学や産業心理学の領域で、主に研究が積み重ねられてきた。このような経過を反映してか、疎外感という概念は、まことに多義的である。最近では、「人間疎外」ということばも生まれ、殆ど「疎外」と同義に用いられている。alienation が、このようにいくつもの訳語を持って使用されている。

しかし、田崎と吉川 (1975) が述べるように、疎外(ないし人間疎外)と、疎外感という概念は、区別される必要がある。すなわち、客観的状态としての alienation (他者がその人をどう見るか) と、主観的意識としての alienation (自分がどう感じるか) は、全く別の次元であろう。田崎と吉川 (1975) は、心理学的概念としては、後者、すなわち alienation の意識的側面=疎外感としている。従来の研究では、この点が十分明確に区別されなかった。

* 広島大学教育学部

このような疎外感を、操作的に定義し、実証的研究の祖上に乗せようとする試みは、疎外感を測定する尺度を構成することにより、1950年代半ばから若干行われてきた。Srole (1956) や Nettler (1957), Dean (1961) らの尺度があり、最もよく用いられたのは、Dean のものであるが、これは、無力感 (powerlessness), 無規範感 (normlessness), 社会的孤立感 (social isolation) の3つの下位尺度から構成された疎外感尺度であった。

しかし、これらの尺度はいずれも、①疎外感と疎外の

概念に混同がある、②欧米文化の反映 (宗教など) が認められる、③主として大学生以上を対象に作成されており、中学生・高校生などには当てはめがたい、等の問題を内包している。そこで、本研究では、新たに疎外感尺度を作成することとした。

また、Stokols (1975) が指摘するように、従来の疎外感測定が、静的現在的なものにとどまり、発達の視点は考察されていないので、本研究では、さらに、疎外感に個人内の連続的過程 (sequential process) を想定し、発

TABLE 1 Rotated factor loadings of alienation scale items (N=272)

No	原No	I t e m	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	h ²
1	1	「私は1人ぼっちである」と感ずることがよくある。	56	20	20	23	45
2	2	うちとけて話ができる人は私には余りいないように思う。	65	12	29	01	52
3	3	私のことを真剣に考えてくれる人もいないだろうと思う。	-47	-33	-10	-01	34
4	4	他人から「仲間はずれにされている」と感ずることはまずない。	-62	-07	-05	-07	41
5	5	みんなが冷たい眼で私を見ているようだ。	59	18	00	23	44
6	6	何かいっても無視されることが多いようだ。	57	06	04	25	40
7	7	私が働きかければ、みんな親切に応じてくれよう。	-62	-09	-05	-05	40
8	8	自分はやさしい人々に囲まれて決して1人ではないと思う。	-74	-12	-18	-11	61
9	9	私には、本当に理解しあえる人はほとんどいないように思う。	62	15	29	05	50
10	10	みんないつも暖かい心で私を迎え入れてくれるように思う。	-75	-08	-07	-05	59
11	11	私を認めてくれる人はいないようだ。	47	21	18	17	33
12	12	私は他人からあまり信頼されていないようだ。	44	26	16	11	30
13	41	何の目標もなく日々を暮らしている気がする。	10	34	58	05	46
14	42	どうも日々の充実感に欠ける。	21	18	75	12	66
15	43	私の生活は実に「いきいき」しているように思う。	-20	-18	-73	-18	65
16	44	毎日の生活は、単調で張りがないという気がする。	06	16	70	19	55
17	45	「自分なりに一生けんめい生きていて満足だ」と思う。	-14	-23	-66	-20	56
18	46	「私は今生きている」と心からそう思う。	-23	-18	-53	-14	39
19	47	毎日が同じことの繰り返しでたまらなく退屈に思える。	05	21	68	23	57
20	48	生きがいもなくただ何となく生きているようだ。	23	24	65	18	56
21	49	私の生活は充実していると感じていると思う。	-16	21	-79	-20	74
22	50	毎日が緊張の連続で息苦しさを感ずることもある。	00	-04	-14	56	33
23	51	わけもなく疲労を感ずることがしばしばある。	01	16	27	51	36
24	52	「何かに圧迫されている」という感じはあまりない。	-13	-11	-20	-66	51
25	53	自分がしたくないことをさせられているとよく感ずる。	08	11	16	52	32
26	54	何かに縛られ自由に動けないようだ。	08	07	19	69	52
27	55	割あいマイペースで毎日を過ごしていると思う。	-23	-28	-22	-48	41
28	56	何かに追いつめられているような感じをよく持つ。	20	07	18	72	60
29	57	比較的落ちつきのあるゆったりした毎日であるようだ。	-24	-03	-22	-56	42
30	58	何かにせきたてられ生きている感じがする。	13	04	12	67	49
31	72	私の毎日は、実に「のびのび」しているように思う。	-26	-20	-45	-49	56
32	59	私は無用な人間だと思う。	15	60	23	19	48
33	60	自分はかけがえのない大切な存在だと思う。	-12	-59	-28	-01	44
34	61	私はやる気になれば何でもできるように思う。	-19	-37	-08	-01	18
35	62	自分がどうなってもそう悲しむ人はいないだろう。	30	48	15	11	36
36	63	自分は欠点だらけの人間だと思うことがある。	27	42	-10	11	28
37	64	「たまたま自分がいやになる」そんな気持ちになることがある。	15	41	08	21	24
38	65	私は、有能な可能性に富む人間であると思う。	00	-69	-22	04	53
39	66	「私は何をやってもだめな人間だ」という気もある。	24	51	09	17	36
40	67	私は何の役にも立たないつまらない人間だと思う。	29	70	10	20	64
41	68	私には人よりすぐれた何かがあるという気がする。	-08	-63	-18	04	45
42	69	私はこの社会に欠くことのできない貴重な存在だと思う。	-05	-64	-31	-02	51
43	70	私は何かができる人間であると思う。	-10	-66	-16	-02	47
44	71	私は社会の中で取るに足らない小さい存在のように思う。	02	55	22	16	38
Contribution(%)			12.1	12.0	12.6	9.7	46.4

達的变化の過程も分析する。これを発展させるならば、人間の一生における疎外感の質的变化過程も問題にすることができるであろう。

そこで、本研究では、

- (1) 疎外感尺度を構成し、
 - (2) 青年期における疎外感の発達の変化、および疎外感と適応との関係を分析する、
- ことを目的とした。

II 研究 1

1. 尺度の作成

(1) 「疎外感」の定義と質問項目の作成

疎外感を、「集団生活や社会生活の中で自分が他者*から排除されている、或は、他者との間に距離感・異和感を感じ、どうしてもなじめない、溶け込めないという認知的感情」と定義し、Schimek & Meyer (1975) の研究を参考に、次の3つの概念に下位分類した。

I). 対人的疎外感 (interpersonal alienation) : 対人的関わりの中で生ずる孤独感**および不信任感。

II). 社会的疎外感 (social isolation) : 自己の人生や社会などに対する悲観的な見方 (厭世感)、さまざまな事象に対する関心の欠如 (無力感)、強い圧力意識 (圧迫感)、さらに自己目的性の空しさ (空虚感) など、主に社会との関わりにおいて顕在化する疎外感。

III). 自己疎外感 (self alienation) : 肯定的な自己の評価が困難で、自己を拒絶する自己嫌悪感。

以上の定義と、各下位概念に基づいて、それぞれ約10項目、計72項目を作成し、心理学専攻の大学院生5名に、各々の質問項目がどの下位概念を測定するものであるか分類させた。80%の一致率を基準に項目を選定したところ、すべての項目が基本的に妥当な内容であった。

(2) 項目分析

I). 対象および調査法

大学2年生176名 (男105, 女71名) と、女子高校2年生96名***の合計272名に、3枚1組、72項目の質問紙を集団的に実施した。回答は、7段階評定で、記名方式****をとった。

II). 結果

* 「他者」とは、単なる他人にとどまらず、社会や社会に生起する事象、自分の身邊に起こる事柄、さらに自分自身も含めて考える。

** こうした下位概念は、すべて、疎外感関係の論文から引用された。

*** 項目分析と因子分析時にのみ対象とされ、以下の分析からは除外された。

**** 本研究では、研究目的と結果の利用の観点から、すべてこの方法が採用された。

TABLE 2 Split-half reliabilities of the alienation scale

	College (N=176)	High School (N=134)	Jr. High School (N=305)
rsb	0.94	0.94	0.95

TABLE 3 Test-retest reliabilities of the alienation scale

Interval		A Month (N=25)	A Year (N=29)
F ₁	Loneliness	0.62	0.56
F ₃	Emptiness	0.71	0.23
F ₄	Opression-Restriction	0.75	0.05
F ₂	Self-Contempt	0.84	0.57
Total		0.75	0.40

各項目について、疎外感が高いほど高得点となるように得点化を行った。

次に、得点分布の上位下位各々25% (68名) を抽出し、GP分析 (t検定) を行った。その結果、No. 35 (できるだけ自分の視野を広げたいと思う) を除くすべての項目に、有意差が認められた。

(3) 因子分析

項目分析を通過した71項目について、因子分析 (主因子法→Varimax回転) を施行した。その結果、F₁: 孤独感 (高因子負荷12項目)、F₂: 自己嫌悪感 (13項目)、F₃: 空虚感 (9項目)、F₄: 圧迫拘束感 (10項目) の4因子が抽出された。

この44項目を最終項目とし、TABLE 1に各項目および44項目での再分析による因子構造を示した。

また、この44項目について、字句の表現を一部やさしく書き改め、中学生用*を作成した。対象は、中学2年生305名 (男155名, 女150名) で、項目一総得点間の相関係数算出により、項目分析を行った結果、44項目のすべてに有意な相関 (.340~.713, いずれも、 $P < .001$) が認められた。この44項目を、中学生用疎外感尺度**とした。

2. 尺度の信頼性

信頼性は、折半法および再検査法により分析した。

折半法による結果を、TABLE 2に示す***。

これによって、内的整合性の観点からの信頼性は、非常に高いといえる。

* 中学生数名を対象とする予備調査の結果から、項目の内容を変えずに、字句の修正が行われた。

** スペースの関係で、項目は省略する。著者に問い合わせられたい。

*** 高校生の対象は、新たに調査した134名 (男72名, 女62名) である。

TABLE 4 Comparison of the Bender score of the high alienation group with that of the low

Figure No	Group	H-AI (N = 8)	L-AI (N = 8)	t value
1		0.25 (0.71)	0.88 (1.25)	-1.23
2		1.88 (2.75)	0.38 (1.06)	1.44
3		5.38 (3.11)	1.75 (1.49)	2.97*
4		4.13 (3.83)	0.75 (1.39)	2.34*
5		5.13 (3.44)	2.25 (1.75)	2.11
6		1.13 (1.36)	3.00 (2.33)	-1.97
7		5.25 (4.40)	2.75 (2.38)	1.41
8		3.00 (5.10)	2.75 (3.01)	0.12
Construction		0.25 (0.71)	1.13 (1.55)	-1.45
Total		26.38 (10.68)	15.63 (7.69)	2.31*

*P<.05

再検査法では、1か月と1か年の2つの期間を設定し、それぞれ、25名、29名の大学生を対象に相関係数を求めた。TABLE 3に、その結果を示す。

これによると、比較的短期間では、いずれも高い安定性を示しているが、一年期間になると、空虚感や圧迫拘束感の下位尺度で、相関係数が低下した。これは、尺度の信頼性の問題というよりは、むしろ、これらが、状況関連の色彩の強い下位尺度で、敏感に状況の変化を反映することを示唆するものと考えられよう。

3. 尺度の妥当性

基準関連妥当性と構成概念妥当性について検討した。

疎外感の認知的研究では、疎外感の高い者の特徴として、認知・情報処理機能が劣ることなどが実証的に示されている (McClosky & Schaar, 1965; Durand & Lambert, 1979ら)。たとえば、Durand らは、疎外感の高い者は認知的に単純であることを報告している。

そこで、本研究では、視覚運動検査として考案されたベンダー・ゲシュタルト・テスト (BGT)*を用い、それとの関連から妥当性検討を試みた。

対象は、大学生20名で、BGTはスライドを作成し、暗室においてスクリーンに投射をした。パスカル・サッテル法に準じ、通常のBGTに関する教示(但し、各図形の呈示時間は5secに変更)の後、図形を一枚ずつ呈示。模写終了後、疎外感尺度を実施した。

* 視覚運動ゲシュタルト機能の成熟と障害の様相、器質的な脳欠損や認知様式の異常性、パーソナリティの偏倚などの検出に有効とされる臨床的検査である。

疎外感得点をもとに、高疎外感(H-AI)群(M=183.88, SD=20.76)、低疎外感(L-AI)群(M=141.00, SD=15.53)それぞれ8名を選出した。

この両群のベンダー得点を比較したものをTABLE 4に示す。

これによると、ベンダーの総得点は、H-AI群が有意に高く、その認知様式に何らかの主観的わい曲(ゆがみ)が推測される。また、図版ごとの分析では、No 3とNo 4*において、H-AI群が有意に高い得点を示した(各々、 $t=2.97$, $t=2.34$ ともに、 $df=14$, $P<.05$)。

この結果は、疎外感高得点者の認知・情報処理過程における偏倚(或は特徴)を示し、予想と一致する。これは、高疎外感者では、認知様式がより主観的で、客観的な把握(ものの見方)や判断に欠ける傾向があると解釈できるかも知れない。

疎外感尺度の1つの下位概念である自己嫌悪感の因子は、「自己概念」とも密接な関係をもつと考えられる。ここでは、その1つの指標として、「現実自己」と「理想自己」とのズレの程度をとりあげ、構成概念妥当性の検討を行う。

大学生27名を対象とし、疎外感尺度と自己概念尺度(49項目)を、集団的に実施した。自己概念尺度は、長島他(1966)を用いた。

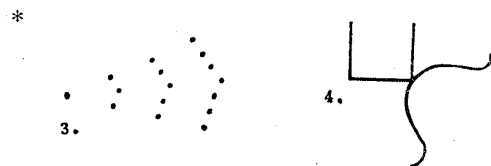
疎外感の総得点、および現実自己と理想自己のズレ(Σd^2)の値を算出し、スピアマンの順位相関係数を求めた。その結果、予想通り正の有意な相関係数($r=0.461$, $P<.05$)が得られ、この両者は、ある程度、自己評定(自己認知)に関する共通の特性を測定しているものと考えられる。

III 研究2

疎外感尺度を用い、青年期における疎外感の発達の变化の一部を明らかにし、疎外感と人格の発達ないし適応との関係を解明する。

1. 疎外感の発達の变化

大学生176名(男105名, 女71名)、高校生134名(男72名, 女62名)、中学生305名(男155名, 女150名)の3群を設定して調査対象**とし、調査はそれぞれ、78年10月、



** 研究1の対象と同一である。

TABLE 5 Means and standard deviations of alienation scores for college, high school and junior high school students

	College (N=176)			High School (N=134)			Jr.High School (N=305)			(M) Coll.H.S.:Jr.H.S.			(F) Coll.H.S.:Jr.H.S.		
	M (N=105)	F (N=71)	t	M (N=72)	F (N=62)	t	M (N=155)	F (N=150)	t	Co.:H.S. t	Co.:Jr. t	H.S.:Jr. t	Co.:H.S. t	Co.:Jr. t	H.S.:Jr. t
Loneliness	36.61 (12.24)	38.28 (11.44)		35.49 (10.43)	33.90 (10.42)		42.61 (12.98)	39.81 (12.67)			***	***	**		**
Emptiness	32.81 (12.10)	33.01 (11.29)		33.88 (12.67)	35.84 (11.27)		36.28 (10.28)	35.53 (11.05)			*				
Oppression- Restriction	34.94 (11.46)	33.38 (9.57)		35.60 (10.47)	35.79 (10.15)		38.57 (10.94)	36.87 (11.19)			*			*	
Self- Contempt	44.17 (12.38)	49.80 (10.82)	**	42.99 (11.55)	49.31 (11.54)	**	47.87 (16.77)	55.36 (11.33)	***			*		***	***
Total	148.53 (37.77)	154.48 (31.10)		147.94 (32.03)	154.84 (31.48)		165.34 (42.79)	167.56 (36.53)			**	***		**	*

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

79年1月, 79年2月に行った。

大学生, 高校生, 中学生の男女各各について, 疎外感の下位尺度と総得点の平均値および標準偏差を算出し, TABLE 5に示した。また, 疎外感得点の分布を, FIG. 1に示す。

TABLE 5から, 疎外感得点の性差をみると, 大学生, 高校生, 中学生のいずれにおいても, 自己嫌悪感の得点は, 女子が有意に高かった(各々, $t=3.11$, $P<.01$; $t=3.16$, $P<.01$; $t=4.56$, $P<.001$)。その他の下位尺度および総得点では, 性差は認められなかった。

TABLE 5に基づいて, 疎外感得点の発達的变化を, 下位尺度ごとに分析すると, ①孤独感では, 男子で, 中学生が高校, 大学生より(各々, $t=4.07$, $t=3.73$, とともに $P<.001$), 女子では, 大学生, 中学生が高校生より(各々, $t=2.80$, $t=3.23$, とともに $P<.01$)有意に高い傾向が見出され, ②空虚感では, 男子において, 中学生が大学生より($t=2.48$, $P<.05$)得点は有意に高かった。また, ③圧迫拘束感では, 男女とも, 中学生が大学生に比べ有意に得点は高く(各々, $t=2.57$, $t=2.25$, とともに $P<.05$), ④自己嫌悪感では, 男子では, 中学生が高校生より($t=2.23$, $P<.05$), 女子では, 中学生が高校生, 大学生より(各々, $t=3.50$, $t=3.44$, とともに $P<.001$)得点は有意に高かった。

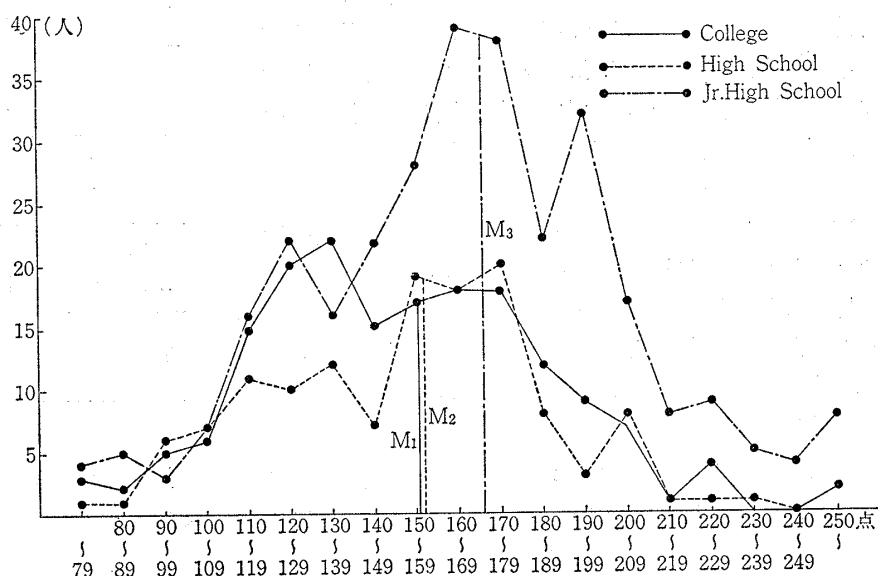


FIG. 1 Distribution of alienation score totals

さらに, 疎外感の総得点についてみると, 男女とも, 中学生は, 高校, 大学生に比べ, 有意に高い得点を示した(男各々, $t=3.55$, $P<.001$; $t=3.24$, $P<.01$. 女各々, $t=2.39$, $P<.05$; $t=2.59$, $P<.01$)。

これによれば, 疎外感では, 青年期において発達(加齢)とともに, 徐々に緩和の方向へ向かい, 恐らく, 青年前期において頂点に達していると思われる。これは, 疎外感情が自我の成熟や発達と密接な関わりを持って変化していくことを示唆するものであろう。

孤独感得点の発達の減少の傾向(殊に, 中学—高校生間)は, 他者の一時的な発言や行動に対して, 自己の内面が動揺することが少なくなり, 対人関係的な脆弱さか

TABLE 6 Correlation between alienation score and ego identity

	Loneliness	Emptiness	Oppression-Restriction	Self-Contempt	Total
Ego Identity	-0.55***	-0.45***	-0.52***	-0.59***	-0.69***

*** $P < .001$

ら徐々に脱却し、成熟へと向かう過程を示すものと考えられる。また、落合（1979）の言う孤独感の対自の次元（自己の個性認識により生ずる孤独感）の目覚めと展開による孤独感の対他の次元の優位性の相対的な低下なども、その一因として考えることができよう。

空虚感や圧迫拘束感の下位尺度得点において、大学生が中学生より低いという結果は、成長とともに、次第に社会や周囲の圧力から解放され、自由な雰囲気と自己充足感を獲得するようになることを示すものであろう。

また、自己嫌悪感得点の減少傾向は、まさに、自己受容の発達の流れに対応していると思われる。

以上のように、青年期における疎外感の発達の減少傾向は、理論的に妥当であるが、中学生が相対的に強い疎外感の世界に生きているという現実、心理学的にも教育学的にも注目される必要があるであろう。このことは、現代における問題行動の低年齢化と密接な関わりを持ち、その内面世界の一面を示唆するものかも知れない。

2. 疎外感と自我同一性

適応ないし精神的健康の1つの指標として自我同一性をとりあげ、疎外感との関わりを分析する。

対象は女子大学生189名であり、79年6月に調査を行った。自我同一性尺度は、古沢（1968）を利用した。

疎外感ならびに自我同一性の粗点を算出し、ピアソンの積率相関により分析した。結果をTABLE 6に示す。

これによると、疎外感の得点は、すべて、自我同一性得点と負の有意な相関を呈している。このことは、疎外感高得点者においては、確固とした自己定義がなされず、人間的にも、対人関係的にも、社会的にも未熟であり、適応がうまくなされていない、逆に、疎外感低得点者は、人格の発達も進み、成熟しており、適応的にもものごとに対処している傾向をもつものと考えられる。

3. 疎外感と問題行動

ここでは、いわゆる問題児について、疎外感尺度次元

TABLE 7 Comparisons of alienation scores of problem students with those of non-problem students

Group Alienation	Problem Students (N=11)	Non-Problem Students (N=229)	t value
Loneliness	52.09 (18.62)	37.27 (11.90)	2.62*
Emptiness	43.00 (12.86)	34.48 (10.63)	2.16*
Oppression-Restriction	46.73 (14.13)	36.65 (10.17)	2.34*
Self-Contempt	61.91 (16.59)	47.69 (13.53)	2.80**
Total	203.73 (52.82)	156.08 (36.48)	2.96**

* * $P < .01$ * $P < .05$

TABLE 8 alienation scores and representative maladjustment behavior for each problem student

No (SEX)	Loneliness	Emptiness	Oppression-Restriction	Self-Contempt	Total	Problem Behavior
1 (M)	84	63	70	88	305	粗暴、教師への暴力
2 (M)	75	43	54	74	246	自己中心的、攻撃的
3 (M)	59	54	61	67	241	授業中の奇声
4 (M)	73	52	50	64	239	孤立、衝動的
5 (F)	49	48	47	68	212	悪グループのブレイク
6 (M)	53	28	54	76	211	怠学、遅刻
7 (M)	52	51	25	72	200	教師に対する挑戦的態度
8 (F)	29	46	51	50	176	怠学、化粧
9 (M)	32	40	45	54	171	喫煙、悪グループの補佐
10 (M)	25	33	38	28	124	家出、夜遊び
11 (M)	42	15	19	40	116	怠学、暴力
Means for Jr.H.S.	41.23	35.82	37.73	51.55	166.43	(中学生全体、N=305の平均)

が、問題行動（不適応行動）の説明に有効であるか否か検討し、疎外感と適応との関係を考察する。

中学3年生240名（男110名、女130名）を対象として、79年7月に、集団的に疎外感尺度を実施した。

問題児については、「指導上、特に問題を感じる生徒」という評定基準で、学年の全担任（8名）が合議のうえ選定された。これによって、問題児群11名、一般児群229名とに分類し、問題児については、学校生活上の問題点を中心に、その不適応状況を、各担任との個別面接により詳細に把握した。

問題児の内訳は、男子9名、女子2名であり、いずれも非行傾向の者であった。

問題児群と一般児群の疎外感得点を比較したものがTABLE 7である。また、TABLE 8には、問題児各事例ごとの疎外感得点および不適応行動の概要を示す。

TABLE 7によると、問題児群は、一般児群に比べ、疎外感のすべての尺度において有意に高い得点を示している。これは、問題児と言われる者が、強い疎外感を体験していることを示している。また、事例ごとの分析でも、事例10と11（この2事例は、非行化傾向が著しく、「否定的同一性」選択により、疎外感得点が低く現われたと考えられる）を除く他の事例で、この傾向が認められる。

すなわち、表面的には、自己の力を誇示するかのよう乱暴をはたらき、逸脱した行動をとりやすい生徒たちも、内面では、対人感情におけるやりきれない淋しさや空しさ、自己嫌悪などに苦しんでいることが示され、暖かい援助の手を強く求めているように思われる。

疎外感と不適応行動との因果関係を、疎外感レベルからだけでは不十分であろうが、「疎外感が問題行動を惹起させる素因となり、そうした不適応行動が、疎外感をますます増長させる」と想定することも可能である。

ここでは、とりあげた問題児の数が少ないこともあり、問題児を一括して一般児との比較を行ったが、今後は、問題行動をその様相によってさらに細分化し、それらの疎外感のパターンの特徴を明らかにすることも必要であろう。これによって、或いは、現在問題となっている、家庭内暴力や学校内暴力の発生因の究明とともに、その処遇に関して1つの示唆を与えうると思われる。

IV 要約と考察

本研究では、疎外感尺度を作成し、青年期における疎外感の発達的变化および疎外感と適応との関係を検討した。主な結果は、次の通りである。

1. 疎外感の青年期において発達的に減少する。
2. 疎外感の自己同一性（古沢の尺度による）と負の有意な相関がある。

意な相関がある。

3. 問題児は、問題を持たない者に比べ有意に高い疎外感を示す。

しかし、次のような問題や限界も考えられる。

第1に、疎外感の発達の変化は、横断的方法により分析されたが、これは、対象の選択の仕方により、結果が若干異なる可能性もある。今後さらに、縦断的研究によって、この点を検討することが必要であろう。

第2に、疎外感と適応との関連を分析する場合に、疎外感の強弱という量的側面からの接近のみでは、十分でないことが考えられる。たとえば、疎外感をどうとらえるか（受容できるもの、或は拒絶すべきものと感じるなど）により、適応の様相も異なってくると想定される。このような観点からは、疎外感の問題行動などのネガティブな心理側面と密接な関わりを持つと同時に、独創性や創造性などの人間の積極的な行動特性との関連において、ポジティブな側面から問題にすることも可能であろう。

第3に、本研究で抽出された問題児はすべて、非行傾向の者であった。現場の教師が、特に指導に窮するのは、このような行動化を伴う生徒であることが多いが、自閉的傾向や学業不振の者など他の様相の問題児も含め、疎外感との関わりや各問題児間の疎外感の特徴を明らかにすることも必要と思われる。

引用文献

- Bratter, T. E. 1973 Treating alienated, unmotivated, drug abusing adolescents. *Amer. J. Psychother.*, 27, 585-598.
- Calicchia, J. P., & Barresi, R. M. 1975 Alcoholism and alienation. *J. Clinic. Psychol.*, 31, 770-775.
- Davids, A. 1955a Alienation, social apperception, and ego structure. *J. Consult. Psychol.*, 19, 21-27.
- Davids, A. 1955b Generality and consistency of relations between alienation syndrome and cognitive processes. *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 51, 61-67.
- Dean, D. G. 1961 Alienation: Its meaning and measurement. *Amer. Sociol. Rev.*, 26, 753-758.
- Durand, R. M. & Lambert, Z. V. 1979 Cognitive differentiation and alienation of consumers. *Percep. Motor Skills*, 49, 99-108.
- Gold, M. 1969 Juvenile delinquency as a symptom of alienation. *J. Soc. Iss.*, 25, 121-135.
- 近藤敏行・小林利宣 1959 広島家裁式家族親疎性診断

- 目録について——その作製ならびに実用——家庭裁判月報, No 12 最高裁判所事務総局
- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性の形成と親子関係 依田新(編) 現代青年の人格形成 金子書房
- McClosky, H., & Schaar, J. H. 1965 Psychological dimensions of anomie. *Amer. Sociol. Rev.*, 30, 14-40.
- 長島貞夫他 1966 自我と適応についての研究(3) 日本心理学会第30回大会発表論文集 513-514.
- Nettler, G. 1957 A measure of alienation. *Amer. Sociol. Rev.*, 22, 670-677.
- 落合良行 1979 孤独感の内包的構造についての仮説 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 220-221.
- Paulson, M. J., Lin, T. T. & Hanssen, C. 1972 Family harmony: An etiologic factor in alienation. *Child Develop.*, 43, 591-603.
- Rode, A. 1971 Perceptions of parental behavior among alienated adolescents. *Adolescence*, 6, 19-38.
- Schimek, J. G., & Meyer, R. M. 1975 Dimensions of alienation and pathology. *Psychol. Rep.*, 37, 727-732.

付録

中学生用疎外感尺度項目

No	項 目
1	「私は一人ぼっちである」と感ずることがよくある。
2	心をうちあけて話ができる人は私にはあまりいないように思う。
3	私のことをしんげんに考えてくれる人もいだろうと思う。
4	他人から「なまはずれにされている」と感ずることはまずない。
5	みんながつめたい眼で私をみているようだ。
6	何か言ってもむしされることが多いようだ。
7	私が話しかければみんな親切におうじてくれよう。
8	自分はやさしい人々にかこまれてけっして一人ではないと思う。
9	私にはほんとうに理解しあえる人はほとんどいないように思う。
10	みんないつもあたたかい心で私をむかえ入れてくれるように思う。
11	私のことをわかってくれる人はいないようだ。
12	私は他人からあまりしんようされていらないようだ
13	何の目標もなく日々をくらしている気がする。
14	どうも日々のじゅうじつ感に欠ける。
15	私の生活はじつに「いきいき」しているように思う。
16	毎日の生活は単調で張りがないという気がする。
17	「自分なりに一生けんめい生きていて満足だ」と思う。
18	「私は今生きている」と心からそう思う。
19	毎日が同じことのくりかえしでたまらなくたいくつに思える。
20	生きがいもなく、ただ何となく生きているようだ。
21	私の生活はじゅう実していて活気に満ちていると思う。
22	毎日がきん張の連続でいき苦しさを感ずることもある。
23	わけもなく「つかれた」と感ずることがしばしばある。

- Schubert, D. S. P., & Wagner, M. E. 1975 A sub-cultural changes of MMPI norms in the 1960s due to adolescent role confusion and glamorization of alienation. *J. Abnorm. Psychol.*, 84, 406-411.
- Srole, L. 1956 Social integration and certain collaries: An exploratory study. *Amer. Sociol. Rev.*, 21, 709-716.
- Stokols, D. 1975 Toward a psychological theory of alienation. *Psychol. Rev.*, 82, 26-44.
- 田崎醇之助・吉川栄一 1975 疎外感 大日本図書
- Valentine, J. H. 1974 Alienation and the family history. *Amer. J. Psychother.*, 28, 592-598.
- Wolfe, R. N. 1976 Trust, anomia, and locus of control: Alienation in U.S. college students in 1964, 1969, and 1974. *J. Soc. Psychol.*, 100, 151-152.

〈付 記〉

本研究の一部は、日本教育心理学会第21回大会(1979)、日本心理学会第43回大会(1979)、中国四国心理学会第36回大会(1980)にて発表した。

(1981年4月27日受稿)

24	「何かにおさえつけられている」という感じはあまりない。
25	自分がしたくないことをさせられているとよく感ずる。
26	何かにしばられ自由に動けないようだ。
27	割あいマイペースで毎日を過ごしていると思う。
28	何かを追いつめられているような感じをよく持つ。
29	比較的落ちつきのあるゆったりした毎日であるようだ。
30	何かせかされて生きている感じがする。
31	私の毎日はじつに「のびのび」しているように思う。
32	私は無用な人間だと思う。
33	自分がかげがえのない大切な存在だと思う。
34	私はやる気になれば何でもできるように思う。
35	自分がどうなってもそう悲しむ人はいないだろう。
36	自分はけっ点だらけの人間だと思うことがある。
37	「たまたま自分がいやになる」そんな気持になることがある。
38	私はかのう性に満ちた人間であると思う。
39	「私は何をやってもだめな人間だ」という気もする。
40	私は何の役にも立たないつまらない人間だと思う。
41	私には人よりすぐれた何かがあるという気がする。
42	私はこの社会に欠くことのできない貴重な存在だと思う。
43	私は何かができる人間であると思う。
44	私は社会の中でとるにたらない小さい存在の ように思う。

ABSTRACT

A DEVELOPMENTAL STUDY OF ALIENATION AND ADJUSTMENT
DURING ADOLESCENCE

by

Kazuhiro Miyashita & Toshinobu Kobayashi

The purposes of the present study were to construct an Alienation Scale and to investigate developmental change during adolescence, and to clarify the relationship between alienation and adjustment.

The first study was designed in order to construct a psychological scale of alienation.

72 items were selected according to the concept of alienation as a psychological term. Then, these items were administered to 272 subjects and analysed by means of item- and factor-analysis. Consequently, the alienation scale consisted of 44 items which could be divided into 4 factors, i. e., the feeling of loneliness, emptiness, oppression-restriction, and self-contempt. (see TABLE 1)

Next, the reliability and the validity of this scale were examined. The reliability coefficients assessed by the split-half method were very high ($r \div 0.95$). In the analysis of the stability of the scale, two intervals (a month, a year) were set up. The correlation coefficients were relatively high in a month in-

terval, but in the case of one year, low correlations were seen in some subscales of alienation. It would suggest that the concept of alienation consisted of two facets, i. e., comparatively stable dimension related to personality and the more sensitive dimension to the external factors (circumstances). Furthermore, criterion-related validity and construct validity were found. (see TABLE 2, 3, 4)

The second study was designed to examine developmental change of alienation scores in adolescence and to clarify the relationship between alienation and adjustment. The main findings were as follows:

1. The alienation scores decreased developmentally during adolescence. And sex differences were seen in the subscale of self-contempt. (see TABLE 5)
2. Alienation had a significant negative correlation with ego identity score. (see TABLE 6)
3. Problem students, such as delinquents selected by the teacher, showed significantly higher alienation scores than non-problem students. (see TABLE 7, 8)